

# 2022年度リサーチ・コンソーシアム記念事業 ポスターセッション参加申込用紙

発表タイトル	豊中市の単身世帯の生活に関する調査研究
<p>要旨等：</p> <p>単身世帯(ひとり暮らし)は全国的に増加傾向にあり、彼ら・彼女らの生活リスクの高さも指摘されている。本研究は、豊中市における 30～50 歳代(壮年期)の単身世帯について、その実態と課題の把握を目的とする。</p> <p>まず、単身世帯に関し統計情報の分析を行った。豊中市の壮年期の単身世帯の割合は上昇傾向にある。ただ、壮年男性の単身率は全国に比べ抑制的である。背景には、未婚率の低さや、配偶者のいない壮年男性のうち親と同居する世帯(潜在的単身世帯)の増加があると考えられる。</p> <p>第 2 に、単身世帯の生活リスク(経済・健康・孤立・老後の各リスク)を把握するため、アンケート調査(豊中市在住の市民 8,000 人。回収率 35.8%)を実施した。それによると、壮年期の単身世帯の生活リスクは、「夫婦と子ども世帯」などに比べ相対的に高い。また、配偶者がおらず親と同居している世帯(潜在的単身世帯)も、相対的に生活リスクが高い傾向が見られた。単身世帯に比べ潜在的単身世帯は、老後の生活リスクに関する認識が低い傾向も確認された。</p> <p>第 3 に、単身者のライフコースと生活リスクの関係を把握するため、インタビュー調査(29 人)を行った。それによれば、生活リスクが上昇する契機として、主に離別、転職・離職、親のケアがある。生活リスクが高いケースは、特に男性の未婚者と女性の離別者に見られた。彼ら・彼女らのうち就労の不安定さを背景に親と同居してきたケースで、親のケアを経て単身化するなかで生活リスクが高まる様子が見られた。</p> <p>以上の結果からは、単身世帯は壮年期の段階ですでに生活リスクが相対的に高く、高齢期に向けてそのリスクはさらに高まる可能性があること、親のケア・逝去を経たあとの単身化など、単身世帯へ非自発的に移行するケースで特に生活リスクが高まりやすいことなどがわかった。親のケアが始まるタイミングでの、就労や情報面などでのサポートなどが必要になると考えられる。</p> <p>PR内容：</p> <p>公益財団法人・日本都市センター主催の第 12 回都市調査研究グランプリ(CR-1 グランプリ)で、本研究が最優秀賞を受賞しました。</p> <p>担当：とよなか都市創造研究所 研究員 比嘉 康則</p>	